

出島を巡って争ったドゥーフとラッフルズが 学術的な業績をあげた話

奥 正敬

■はじめに

江戸時代後半の寛政年間、長崎出島のオランダ商館にヘンドリック・ドゥーフ (Hendrik Doeff, 1777-1835) という商館長がいました。彼はヨーロッパの戦乱の影響を受けて、任期を過ぎて日本を離れられないという事態に陥っていました。この最中、オランダの植民地ジャワ島を占拠したイギリスのトーマス・スタンフォード・ラッフルズ (Thomas Stamford Raffles, 1781-1826) が、出島の利権を奪取しようとする作戦を展開します。

守るドゥーフと攻めるラッフルズ、敵対する二人はどちらも行政手腕に長けた人物ですが、双方ともに赴任地で辞書編纂や地域研究を進めていました。ここでは、彼らの出島を巡る争いの経緯と、その学術的な業績をご紹介します。

■ヨーロッパの戦争がアジアへ影響を及ぼす

ヨーロッパでは18世紀の末期からナポレオン戦争が拡大し、フランスは1795 (寛政七) 年に隣国であるオランダを統治下に収め、さらにフランスはイギリスなどのヨーロッパ諸国と戦火を交えていました。従って、東アジアのオランダ植民政略の拠点であるジャワ島もフランスに支配されることになったわけですが、アジアでは本国で産業革命を進めていたイギリスの力が優っており、この海域の制海権も掌握しようとしていました。そして、イギリス軍は1811 (文化八) 年にこの島へ上陸して、長年オランダが培ってきたバタビアも支配下に収めました。

この頃の日本は蘭学が興隆していた時代で、1774 (安永三) 年には杉田玄白らが翻訳した『解体新書』が刊行され、その二年後には平賀源内による電気実験がなされるなど、オランダから入った学問が社会に貢献していました。また、林子平が書いていた警世の書『海国兵談』が1792 (寛政四) 年に禁書とされる中、彼の予測通りロシア勢力の南下が見られ、1800 (寛政十二) 年には徳川幕府が伊能忠敬に蝦夷地の測量を命じていました。

■オランダ出島商館長とイギリスのジャワ島副総督

ドゥーフはアムステルダムに生まれ、オランダの東インド会社に入っていますが、東洋勤務者の人的補充が少ない中で下積みの仕事をこなし、職位を高めています。1799 (寛政十一) 年の初来日の後、一旦バタビアへ戻り、翌年、再び日本の土を踏みましたが、この時共に訪れたのは新しい商館長で、後にドゥーフの敵となるウィレム・ワルデナールでした。ドゥーフはこの商館長の下で三年間働き、1803 (享和三) 年に後を受け継いで、二十六歳の若い商館長となります。

一方のラッフルズはカリブ海のジャマイカに浮かぶ船中で生まれました。イギリスの東インド会社に雇われましたが、苦労を重ね正社員になるのに五年を要しています。1805 (文化二) 年にマレー半島西南にあるベナン島に配属され、マレー語を習得してこの地の民族研究を行っています。また、構想力に秀でていたことから、上申書や意見書をよく書き、自分が主張していたジャワ島征服が成功したのちには同島および属領の副総督に就任しました。

■フェートン号事件にみるイギリスの台頭

長崎の出島にあるオランダ商館長の任期は、1640 (寛永十七) 年に幕府によって一年と定められていました。しかし、ヨーロッパがナポレオンによって蹂躪されはじめると東洋との交通も途絶えがちで、その任期も長くならざるをえなくなっています。このため、前任者のワルデナールも三年を務め、ドゥーフも商館長としての一年が過ぎて日本を離れることができませんでした。

商館長に就任して五年目の1808 (文化五) 年には大きな事件が起きました。イギリスのフェートン号が敵国となったオランダ船の搜索中にオランダ国旗を掲げて出島に来航し、オランダ人を捕らえ水や食料を要求して、拿捕する寸前で逃亡しました。この事件は東アジアにおけるイギリスの台頭を示すもので、長崎奉行の松平図書頭康英が防備の不行き届きの責任をとって切腹するという結末を迎えていました。

その後、バタビアとの通信も途絶え、1810 (文化七) 年から三年間に亘ってオランダ船の来航はありませんでした。この間、ドゥーフは公務の傍ら蘭日辞書の編纂に着手します。作業は